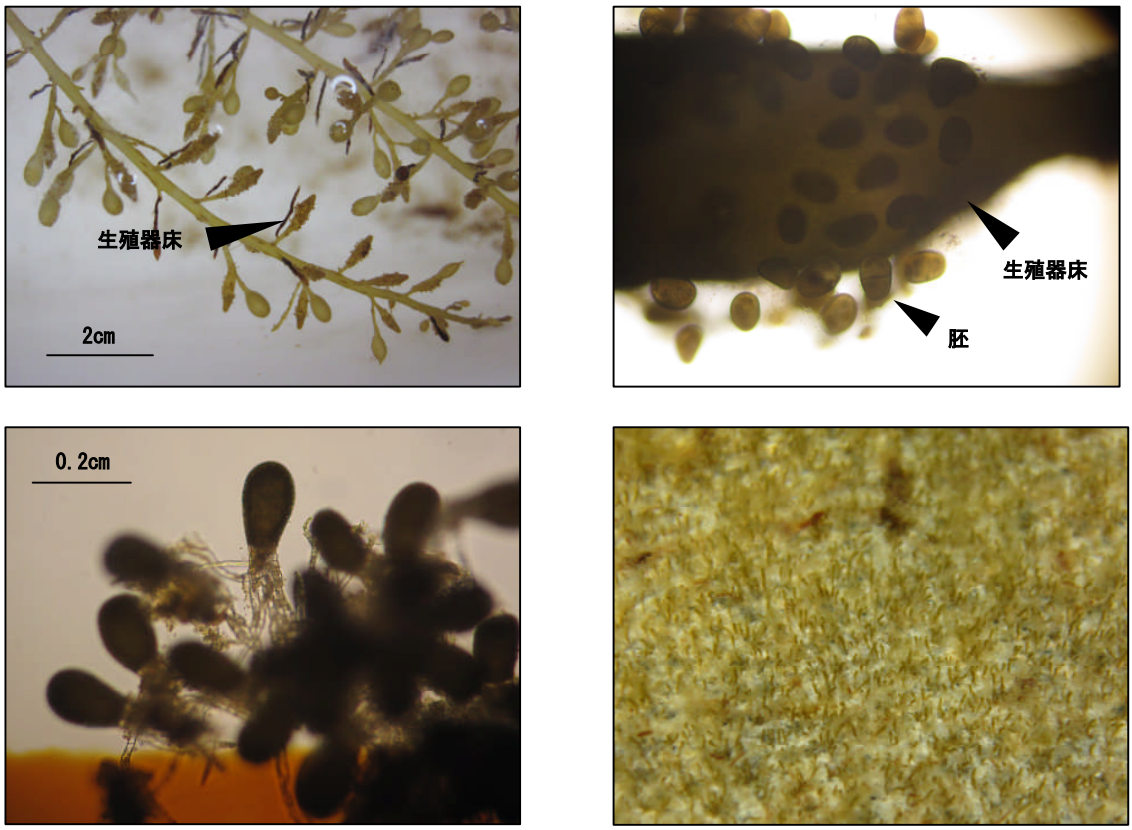
タマハハキモクの採苗

水産研究所では、昨年度からホンダワラ科の褐藻タマハハキモクの種苗生産試験に取り組んでいる。タマハハキモクは波当たりの弱い浅場に生息し、小石程度の基質にも付着するため、砂浜などでもよく見られる。生は薄い黄褐色だが、さっと湯通しすると鮮やかな深緑に変化し、食べるとシャキシャキした歯ざわりが特徴的である。

4 月 19 日から、90×150×20cm の水槽に 30×30cm のコンクリート板を 9 枚敷き、ゴミ避けに目合い 0.75mm の防虫ネットを沈め、その上にタマハハキモクの藻体を乗せて、採苗を行った。昨年の冬季水温が低かったせいか、今年は水産研究所前に自生するタマハハキモク藻体の成熟が、昨年よりも 10 日ほど遅いように感じられ、4 月 25 日時点では成熟した個体と未熟な個体が混在していた。5 月 8 日に藻体を取り除き、コンクリート板に付着した芽数を数えると、74.6 個体/cm^2 で、コンクリート板 1 枚当たりに換算すると約 67,000 個体であった。ホンダワラ科の海藻には雌雄同株と異株の種があるが、タマハハキモクは同株で、春に胚を放出する。放出された胚は、0.09mm ほどの大きさで、粘液質で包まれており、落下した場所に付着しやすくなっている。付着した胚は仮根を伸ばし、芽は棍棒状に伸長する。5 月 24 日時点で、芽の大きさは約 2.5mm で、まだ外見は棍棒のままだが、藻体らしい姿に成長する日が待ち遠しい。（開発利用室：清水）



上左：生殖器床を持った藻体　上右：生殖器床と胚
下左：仮根の生えた胚　下右：コンクリート板上の幼芽